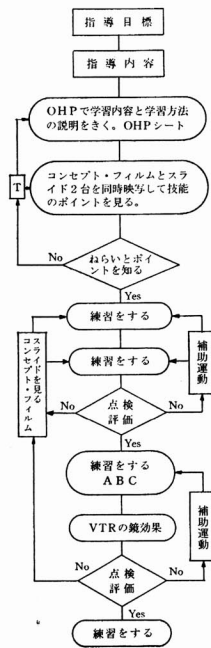


このように考えてくれば、事前に何の準備もなく、ただ単に、子どもに自己評価をやらせるだけ、といったやり方は、このような自分で自分の心をあざむくといったことが入りこみやすいという点において、かなり危険なものと言わざるを得ない。子どもがおこなう自己評価がだれにでもみとめられるような現実的な基盤の上になっただけでおこなわせるためには、子どもが内省するだけでは得られないようなもの、すなわち、教師や級友からどのように見られ判断されているか(資料3・4・5の評価欄)、級友と比較した場合における相対的位置、スポーツ・テストやスキル・テストの結果などのように絶対的尺度上において示された位置などといった情報を提供することが特に重要であろう。

また、子どもがおこなう自己評価がだれにでもみとめられるような現実的な基盤の上になっただけでおこなわせるためには、教育機器の活用(資料6)により、子どもがこれから学習しようとする運動のねらい・やり方や技能のポイントについての情報を簡潔明瞭に提供したり、運動学習中の子ども自身の姿を画面に写しだしたり、また、スローモーションや静止画像として情報を提供したりすることも重要であろう。



(資料6)

主 児童の主体的活動
 教 主教師は、プランニングと器材の準備。
 師 プランニングの段階でより鏡効果を生かす具体的な手段で考える。
 師 時間中の器材操作は児童に主体的にとりくませるようにする。

学	・本時のねらいを知る。 ・補助運動
習	・コンセプト・フィルム (腕立て閉脚とび) を見る。 ・イメージ化ポイントの明示をはかるためコンセプト・フィルムの両向きに分解された技能のポイントを写し出し強く印象づける。
の	・腕立て閉脚とびのイメージ化はかられたか、ポイントはつかまえたか。 ・不明確な子は、随時コンセプト・フィルムへフィールド・バック。
流	・腕立て閉脚とびを練習する。 ・指導段階により練習する。
れ	・各グループごとに点検・評価する。コンセプトフィルム・スライドを基準にする。 ・Yes, No に練習を明示し、フィールド・バックを指示する。 ・能力や練習段階によりグループの再編成をし、わかれて練習をする。 ・グループごとに自分たちでビデオどりして点検・評価をする。 ・No グループは、治療法を見つけてもらい各々、フィールド・バックする。 ・Yes のグループは、発展の指示をうけて練習をする。

腕立て閉脚とびA (資料3)

順	練習の方法	評 価	
		自分	友だち
①	・すこし助走してもぐらいたるの高さに重ねたマット上に手の位置より前方に着地するように腕立てとびあがりをする。 	○	○
②	・台と同じ高さに重ねたマットの上へ着地する。 	○	○
③	・枚数へらしやや低くしたマットの上へ着地する。 	○	○
④	・腕立て閉脚とびをする。 	先生	○

腕立て閉脚とびB (資料4)

順	練習の方法	評 価	
		自分	友だち
①	・うさぎとびのできるだけ遠くへ(足一足まで120cm以上)とぶ。ひさを胸にひきつける。 	○	○
②	・5mくらいの助走からスピードをこらさないで、両足をそろえて踏み切り閉脚とびをする。 	○	○
③	・腰を低くして、顔をおこして閉脚とびをする。 	○	○
④	・ひさを深くまげて安定したフォームで着地できる。 	先生	○

腕立て閉脚とびC (資料5)

順	練習の方法	評 価	
		自分	友だち
①	・7mくらいの助走でややスピードをつけて腕立て閉脚とびをする。からだを前けいして跳やくにはいる。 	○	○
②	・低い踏み切りで、手をすばやくついでとび越す。 	○	○
③	・とび箱を後方へひっかくようにつきはなし1m以上遠くへ着地する。 	○	○
④	・スピード感があり安定したフォームでできるだけ遠くへとびこす。(ト・トーン・ト) 	先生	○